

『志』を高く！～炎える中大生～ 第3回

「旅で、世界をつなげる」を夢に
インターネット・ビジネスを起業

今年末、海外に進出へ

「大手企業に就職して定年まで働き詰めることより、何か自分にしかできないことをやりたかった」。こう語るのは商学部4年の石田言行さん（日本大学第三高校出身）。東京・渋谷のビルの一室にあるベンチャー「株式会社 trippiece」の代表取締役CEOだ。会社は石田さんを含め4人とまだ小さい。でも今年末には海外に進出する計画で、いつか「旅で、世界をつなげる」と夢は大きい。

表紙の人



東京・渋谷にオフィス構える

東京・渋谷が石田さんの仕事場だ。メンバーは石田さんを含め4人のほかにインターン生で、石田さんは授業のある日を除けば、朝から深夜までここで仕事に没頭する。

「trippiece」は「みんなで旅をつくる」をテーマに、オリジナル旅行を企画、共有し、実現するた



石田言行さん

めのプラットフォームだ。ユーザーが「行きたい旅」「やってみたい体験」を企画し、TwitterやFacebookを通して発信。それに興味をもった人が集って企画を共有し、実現させる。同じ興味を持った世界中の人たちをつなぐ場を提供している

のが「trippiece」というわけだ。

「行きたい旅を企画・共有・実現

「trippiece」は、みんなで旅をつくり、みんなで行くためのwebサービスだ。たとえば「trippiece」のあるユーザーが企画者となって「フィリピンでのボランティア企画」を立ち上げるとする。すると、その情報は「trippiece」のメインページに公開され、他ユーザーが閲覧可能となる。

そこで企画者とユーザーは「trippiece」内で情報交換し、旅行内容をより濃密に詰める。この段階で仮に他ユーザーから意見や情報が活発にあげられない場合は、企画者と参加決定者の要望次第で「trippiece」メンバーが積極的に計画作成に関わることになる。

「trippiece」のテーマは「みんなで旅をつくる」であり、その実現のために「trippiece」は全力を尽くす。また旅行計画の宣伝は、大量の費用

を費やすことはせずに、ソーシャル性を主張する。

メディアを通じて友人・知人に旅行計画を伝えていく。「見ず知らずの

人が作った旅行ツアーよりも、「自分の知り合いが作った」旅行計画というほうがそれだけで宣伝になるんです」と石田さんはソーシャルメディアによる新たなビジネスの可能

高校3年生で起業を志す

「株式会社 trippiece」を設立したのは、2011年3月31日。「大学に入ったら起業する」と高校3年生のときに決めていた計画が、大学3年生の最後の日に実現した。



渋谷のオフィスで仕事をする石田さん

石田さんが起業を考えるようになったのは、父と祖父の影響があったからだ。父、祖父ともに日本を代表するバドミントンの選手だったため、石田さんも12歳でバドミントンをはじめた。しかし、どうかし、どうしても父親を抜くことができず、高校時代にバドミ

ントンを続けるのを諦めた。バドミントンでの悔しさが「ビジネスの分野で、何とか父や祖父を超えたい」という思いを募らせた。起業を思い立ったのは、「普通に働いたのでは父を超えない」と考えたからだった。インターネットを使ったビジネスに興味をもった石田さんは、大学1年生の11月に、ビジネスを通じた途上国支援と社会問題の解決への貢献を目指したNPO法人「うのあんいっち」を友人3人と立ち上げた。「世界の子供たちが撮影した写真を社会に発信する」という友人のアイデアに、「面白そうだ」と飛びついた。石田さんの行動力はこれだけに止まらず、その後、旅行会社と連携してアジア諸国へのツアーを企画し、客を集めた。

自分が選んだ生き方を歩む

「国が違えども、愛も友情も存在する」。これは石田さんが持ち続けてきている「世界観」で、いまはそ

の思いは「trippiece」に生かされている。「例えばtrippieceでイギリスの美術館を巡る計画を立てると、参加するのはイギリスの芸術や文化に関心がある人が大半になります。すると、参加者の間では〇〇国人」と国の違いは考えずに、どの人も「美術が好きだな」という認識が広がると思うんです」。

石田さんが、国の違いを超えた人との交流を考えるに至ったのは、広島で被爆し、その後アメリカ人とのハーフの男性と結婚した祖母から、「人のことを見た目や人種で判断してはいけない」と聞かされていたからだだった。

世界を視野に入れていている石田さんは、アジアへの進出を計画し、「trippiece」への出資先との交渉を進めている。企業を経営していくことへの不安はないか、尋ねると、こんな答えが返ってきた。

「僕が一番恐れていることは自分の信念が折れることで、会社が倒産

することではないんです。周りの友人達が大手企業に就職したがる気持ちには理解できるし、それはとても良い選択だと思う。だけど、僕にとつてその生き方は面白いと思えないんです」

石田さんの名前の「言行」は、「いあん」と読む。「人との会話を大切にし、努力して前進していく」という意味があるという。「僕は、死ぬその日だけ勝てればそれでいい。最後に後ろを向いて、行動し続けた自

分に、そして支えてくれたみんなに『ありがとう』を言いたいです」。こう語る石田さんの『志』への挑戦は、まだはじまったばかりだ。(学生記者 鈴木あきほ 法学部2年)

シリーズ

『志』を高く！～炎える中大生～ 第3回

「チームのムードメーカー」女子水泳部員

3年ぶり13度目の

インカレ優勝を支える

9月4日、水泳部が大きな目標を達成した。第87回日本学生選手権水泳競技大会(9月2日～4日、横浜国際プール)で、3年ぶり13度目の総合優勝を飾ったのだ。優勝後、プールに飛び込み、晴れのウイニングスイムをする水泳部員たち。その中に文学部4年の藤田佳那さん(桐蔭学園高校出身)の姿があった。

「チーム意識が高い」と高橋監督

「男子にもついていくし、チーム意識が高く、チームに欠かせない存在」と水泳部の高橋雄介監督が評

価する藤田さんは、シドニーオリンピック(2000年9月)の銅メダルトリオの田中雅美さん、中村真衣さん、源純夏さん以来の女子水泳部員だ。

男子選手に交じって黙々と練習に取り組んできた藤田さんにとって、インカレ優勝は大学生活を締めくめるうえでの悲願だった。「とにかく泳ぐことが好き」という藤田さんに



藤田佳那さん

対するチームメイトの信頼は厚い。主将の青木泰彦さん(法学部4年、新潟県立長岡大手高校出身)は「佳那が頑張っているから自分も頑張ろう、と思う。チームの一人としては(他の部員と)同じだけど、励まされることは多い」と話す。藤田さんは「頑張りがやで明るく、チームのムードメーカー」(高橋監督)なのだ。入学当初はチアリーディング部



笑顔でチームを活気づける藤田さん

「チアはメンバーに恵まれて、楽しかった」というが、気持ちの底には「本当は水泳をやりたい」という思いがぬぐい切れなかった。「泳ぎたいという気持ちがあつたし、水泳から逃げている自分が嫌だった。そう

に水泳に取り組むようになり、それからは毎日泳いだ。「とにかく泳ぐことが好きで、練習を休むことも遅刻することも嫌だった」という藤田さんは、「大学までは水泳を続ける」と決めていた。

ところが、中大への進学が決まると水泳を続けるのを諦めた。当時、中大水泳部は男子選手だけで、女子

選手がいなかったからだ。入学後に練習を見学した藤田さんは、「男子の練習についていけないか、迷惑をかけるのではないか」と思い入部を断念した。

大学では「何かに打ち込みたい」

と考えていた藤田さんは、応援団チアリーディング部に入部。チアではベースのポジションを担当し、応援

だけでなく、6月に

あるチアの全国大会

へ向けて熱心に練習

に取り組んだ。

「チアはメンバー

に恵まれて、楽し

かった」というが、

気持ちの底には「本

当は水泳をやりたい

」という思いがぬ

ぐい切れなかった。

「泳ぎたいという気

持ちがあつたし、水

泳から逃げている自

分が嫌だった。そう



高橋監督の話を聞く藤田さんら水泳部員

「辞める自分を応援して送り出してくれたチアの仲間のため、というのも、水泳を頑張る理由のひとつ」と藤田さんは話す。水泳部でマネージャーとして活動を始めた藤田さんは、ある

いう気持ちを持ちながら、チアの活動をしているのは他のメンバーに失礼だと思った」と振り返る。

マネージャーで水泳部入部

「本当は泳ぎたい」と監督に

大学2年生の4月、新歓期間中に藤田さんは思い切つて水泳部へ行き、

「マネージャーをやりたい」と言つて入部を志願。ただ、「選手をやりたい」とは言えなかった。

マネージャーとして水泳部に入部し、一時期兼部したチアリーディング部は6月の大会を最後に辞めた。

チアのメンバーに退部を伝えるときは、同期生が一人になってしまった

め悩んだが、藤田さんの意思を聞いたメン

バーたちは「佳那の水

泳への思いはよくわか

るよ。だから頑張れる

と思う」と応援して送

り出してくれた。

「辞める自分を応援

して送り出してくれた

チアの仲間のため、と

いうのも、水泳を頑張

る理由のひとつ」と

藤田さんは話す。

水泳部でマネー

ージャーとして活動を始

めた藤田さんは、ある

時、高橋監督から「あなた本当に楽しい？」と声をかけられた。藤田さんが「実は本当は泳ぎたいんです」と正直な気持ちを伝えると、高橋監督は「じゃー、泳げばいいじゃない」と勧めた。

このことを高橋監督に伺うと、「私が強制したわけじゃなくて、彼女の中に『泳ぎたい』という意思がすでにあった。監督は常に選手を見ていて、声をかけたりする。私は彼女の気持ちを言いやすくしただけ」と説明してくれた。

部員の意思を尊重する高橋監督は、「人の目を気にしたりせず、やりたいうことをやればいい。そうじゃないと続かない。自分と闘い、最後には自分に勝たないといけない」と、興味を持ったことにはとにかく挑戦することが大切だと強調する。

男子選手の練習に必死でつく

監督の勧めもあり、藤田さんが同期の水泳部員に「選手になりたい」



黙々と背泳ぎの練習をする藤田さん

う日々が続き、「この時期が一番きつかった」という。しかし、水泳に戻れたという喜びの方が大きく、気持ちはくじけなかった。

選手として本格的に練習が始まると、最初はウォームアップだけでヘトヘトになった。メニューは男子選手と全て同じだ。男子選手の練習の邪魔にだけはならないようにと必死でついていった藤田さんは、「自分がチームにいることのメリットは何かを常に考えていた。デメリットにはなりたくなかった」という。

「試合を意識したメイン練習では、選手がお互いに声を掛け合って盛り上げるんです。練習が終わると、選手同士で握手をして頑張ったことを称えあう、それが楽しい。練習の雰囲気は本当にいいんです」

頑張りがチームメイトに刺激

チームを意識して練習するようになった藤田さんは、次第にチーム内

での自分の役割を自覚するようになっていった。3年生のインカレ前に同期からもらったカードに「佳那の頑張りに刺激を受ける」と書いてあった。「ウォームアップについていけるようになった自分の成長が、チームメイトの刺激になる」と自覚し、自らの役割に徹するようにした。「とにかく明るい。2年から一緒にやってきて、弱音を一度も聞いたことがない」。2年生から水泳部に入部した同期のマネージャーの井上麻実さん（総合政策学部4年、中大杉並高校出身）は、藤田さんについてこう話す。

取材中も笑顔が絶えない藤田さんに、頑張れる理由は？と聞くと、しばらく考えて、「自分にしかわからない達成感があるから。そして、仲間がいるから。一人だったら心が折れていました。本当に支えられました」と目を輝かせて答えてくれた。

（学生記者 野崎みゆき 法学部4年）